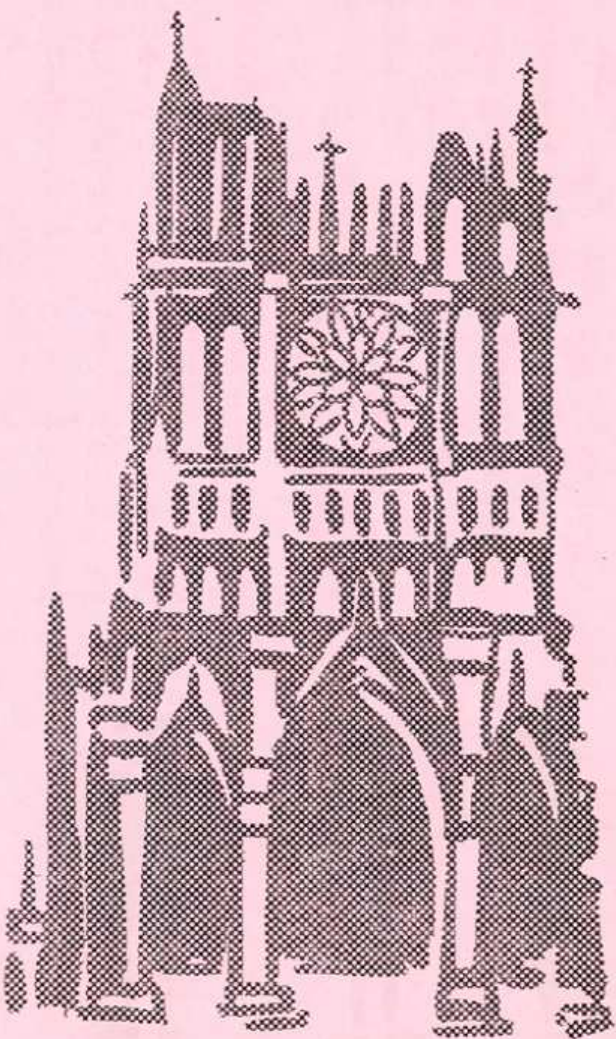


コロバン

の 思ひ出

渡辺 一夫



僕は、銀座の老舗名店と顔馴染の所謂シックな銀座人種ではなく、今も昔も、一年に数えるほどしか銀座を通行しない野暮人種の一人だから、「コロバン」の思い出と言っても、全く大したことはない。僕が「コロバン」という店を知ったのは、一★

★九二七・八年頃ではなかったかと思う。

当時、「コロバン」は現在の「不土コロバン」(これは「コロバン」とは全く無関係な、戦後の「名店」らしいのであるが)、この「不土コロバン」が蟠居しているところに、瀟洒な姿を見せていた。生クリームのお菓子が大変うまかったので、時々立ち寄るやうになったが、店がはやるにつれて、生クリームが必要以上に甘くなってきたので、足が遠くなってしまった。話によると、淡い甘さの生クリームだと、砂糖を節約していると言って、お客様から苦情が出たので、やむを得ず、涙をのんで砂糖の量をふやしたとかいうことである。そして、「コロバン」は、更に発展した。「日本精神」のいたすところである。また「コロバン」は、当時、ほんの僅かの間だったが、現在吉野屋という靴屋さんのあるあたりへ、パリのカフェを真似した小さな「テラース」附きの出店を設けたことがある。こゝでは、簡単なフランス料理、オール・ドゥーヴル(葡萄酒附)が食べられて、なか／＼よかったし、僕は、甘すぎる生クリームの店よりも、こっちのほうが好きだった。しかし、当時の東京には、現在以上に泥が多かったし、現在同様に風も自在に吹いていたから、

折角の「テラース」も、ほこりだらけになりやすかった。今でも孔ぼこだらけの道を絶えず掘りかえしている上に、道幅を広げる余裕のあろう筈のない東京のことであるから、所詮、「テラース」は無縁なのであろう。

昔、僕ら夫婦が、生れて間もない娘をつれて、この「テラース」のあるはずの店へ、オール・ドゥーヴルを食べに行つたことがあるが、お店の人で、パ RJ ズェンヌのやうに清楚な黒衣の麗人が、僕らの食事中、娘を抱いてあやして下さった。後で判つたのであるが、この黒衣の麗人は「コロバン」の御主人門倉さんの令夫人だった。そして、夫人に抱かれた娘は、いづれ、門倉氏の令嬢幸子さんと、女学校で同級になる運命を持っていたのである。奇縁であった。先日、幸子さんからお電話をいたゞき、本誌へ何か書けとの御命令を受け、門倉夫人への御礼返しのためにお引受けした時、直ちに心に甦つたのは、食事の間、僕らの娘を抱いていて下さった黒衣の麗人の姿だった。抱いていたよいた僕の娘は、現在では、満四才になる女の子の母親になってしまっている。

色々なことが、あれから起つていたのである。

地震火事戦乱で、容易に「焦土戦術」の実をあげやすい日本の都会では、「思ひ出の町角」というような現実的なものよりも、歳とともに薄れてゆく記憶のなかで、なをも生き残っている思ひ出のほうが、はるかに「現実的」なのである。

(弘文学者)